

語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 米大統領の英語 (69)

(A Basic Way of Reading Trump-Language)

後藤 寛

今回は(1)、(2)で中米の米国(U.S.A.)領である Puerto Rico に関する旧 tweet を、(3)では建設中のカリフォルニアの国境の壁に関し英語・スペイン語対照で見つめる。pattern に乗りスラスラ読みたい。thematic pattern の認知にはテーマそのものに関する知見(knowledge)が前提となることは言うまでもない。

(1) Puerto Rico is one of the most corrupt places on earth. Their political system is broken and the politicians are either Incompetent or Corrupt. Congress approved Billions of Dollars last time, more than anyplace else has never gotten, and it is sent to Crooked Pols. No good! And by the way, I'm the best thing that's ever happened to Puerto Rico. (August 28, 2019)

▲前回も言ったが音声で聴いている感覚で超高速黙読するのである。stopwatch を片手にこの文例なら 10 秒程度で読んでしまいたい(筆者の stopwatch は壊れてしまい買い替えを考えている)。同時に本会では Ogden の PE [Panoptic English(1929年)] ⇒ BE [Basic English(1932年)]と Richards の EP 本の見定めだろう。

「Puerto Rico は地上で最も墮落した地の1つだ、政治体制は壊れ政治家は無能者が墮落者のどちらかだ、議会は何十億ドルも承認したが、他にない巨額でねじれ曲がった政治家たちの手に渡っている、実にまずい事だ！ 言うておくが Puerto Rico に何かと最も役立った男が私だ」という内容である。

太線の Puerto Rico は元々はスペイン領であった。スペイン語で puerto は「港」(port)、rico は「裕福な」(rich)の意味で米国(U.S.A.)領でありながら大統領選挙でも島のプエルトリコ人に選挙権はない。

太線語 Congress (米国議会)は無冠詞で用いる。gress に意味の核がある。progress (進展する)、aggress (攻撃をしかける)などと同系。実は Basic 語 **degree** とも同系。PIE etymon の音素形は/GHREDH/とされ原義は「歩いて行くこと」で grade (段階)、gradual (漸進的な)などとも同系。

下線部 Congress approved Billions of Dollars last time, ... (議会は前回、何十億ドルを承認した)の last time(前回)とは 2017年9月に Puerto Rico に大被害をもたらせた Hurricane Maria のことのはず。Billions of Dollars を Billions of \$\$\$ と表記した Trump orthography を見たこともある。

文末の下線部 I'm the best thing that's ever happened to Puerto Rico. は I, thing の人間と物が、後ろの happened とつながるが、英語で 'thing' を person の意味で用いることはしばしばある。

(2) Puerto Rico is in great shape with Hurricane Dorian taking a largely different route than anticipated.

Thank you to FEMA, first responders, and all, for working so hard & being so well prepared. A great result! The bad news, Florida get ready! Storm is building and will be BIG! (August 29, 2019)

▲これも stopwatch での計測 10 秒程度で読破したい。Puerto Rico に関する tweet で、上の(1)で触れた Hurricane Maria の2年後にカリブ海に発生した大きな Hurricane Dorian についてである。

「Puerto Rico は Hurricane Dorian の心配はない、予期された進路からかなり外れている、FEMA [fi:mə] (Federal Emergency Management Agency: 連邦緊急事態管理局)、最初に対応したレスキュー隊、また懸命に準備万端整えているあらゆる人に感謝する、いい結果だ！ 困った点は Florida のほうだ、警戒して欲しい！ 暴風雨は徐々に激しくなり、範囲も広がっている」という内容である。

関連して日常的な災害に備えた「訓練」は英語で drill と言い、火災非難訓練なら fire drill が常識。Basic 語では training で意味的には包含するが、drill には何か「集団訓練」という語感がある。「かき回し、回転させること」が原義で、Basic 語 **turn, thread** などとも同系で[r]音を残している。印欧祖語の語根音素形は/TERə/として復元されている〔拙著(2016)、松柏社、第二部、例(45)参照〕。

太線語 shape を用いた be in great [good] shape (調子がよい)は英語で頻出する。この言い方がすんなり使えればかなり英語に慣れている証しとなる。un-Basic 語 shape の代わりに、同系語ではないが Basic 語で **form** とも言う。'be in good form' は Basic の範疇と考えてよい。shape の[jéi]の音声から「切ること」の意味を直感したい。shape は「切って型をとる」ということ。Basic 語 **sharp, short, shirt, ship** など、また

scissors, decision なども同系。プラス α Basic 語と un-Basic 語にも多くの同系語があることは本連載(59)の(2)や(66)の(1)ですで見たとおりである〔詳細は同上拙著、第二部、例(6), (141)参照〕。

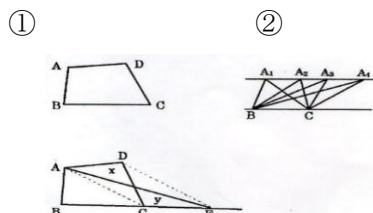
太線語 **anticipated** (予期された) は本連載(1)の⑥で扱ったので確認である。ant [ænt] と icipate [isipeit] 中の **cipate** の部分の語形・音形から瞬間に、何かを「先に受け取ること」の意味が直感できればよい。participate が同系となるし、reception, concept, perception, except など cept [sept] の語形・音形をもつ語とも同系となる。当然 receive, conceive, perceive, なども同系で、さらに Basic 語 **receipt** が同系語として見えてくる。PIE etymon が /KAP/ で、原義が「獲物の頭を偶然つかまえること」として Basic 語 **keep, have** なども同系であることなど、本連載でたびたび見てきた〔他の例は同上拙著、第二部、例(2)参照〕。

太線語 **prepare** (準備する) の語根部は par である。「部分に分け並べること」が原義で Basic 語 **part, parallel, separate, comparison, parcel, apparatus** など、プラス α Basic 語 **partner, particle, parent, pair** など、un-Basic 語 **particular, paragraph, parade, partake, parachute, departure, apartment** など多くの語が同系語として一括される〔同上拙著、第二部、例(93)参照〕。

なお、1行目の **with Hurricane Dorian taking ...** のように with が -ing / -ed と共起する pattern にどうしても慣れたい。英語で頻出する。(例) **with her coming** into the room ; **with** his hat **hanging** down over the face ; **with** a cord **fixed** to a tree ; **with** his gun **dropped** on the floor, etc.

ところで上で shape (形) とともに Basic 語 form、さらに「部分に分け並べること」が原義(root sense)で語根 par をもつ Basic 語をいくつか例示したが、関連し次のような点に触れておきたい。すなわち、いわゆる今日的な cognitive linguistics (認知言語学) での人間の認知能力、また古くからある gestalt psychology (ゲシュタルト心理学) での知覚・視点とその移動などに関わる問題は数学(幾何学)における図形のあり方・その証明法での解法とやはり関わっている。位置(position)だけがあり形(form)のない不可視の点(point)の概念と、可視化される線(line)の問題である〔Basic では **point, position, form** は抽象的 Things General、**line** は具象的 Things Pictured 中の語に分類する、850 語 Basic 本体語表(BASIC WORD LIST)参照〕。

射影(projection)でもある geometry (幾何学) は {geo (= earth) + metry (< meter)} で元来は「土地を測量すること」の意味であったが、たとえば、下の①の四角形 ABCD と面積が等しくなる三角形を求めるのにはどのように作図すればよいか?である。補助線思考(auxiliary line thinking)である。



四角なものを三角にしてしまうわけである。幾何学では **different** である図形を面積上で **same** にするには「等積変形」で考える一手法がある。それをを用い①のような四角の面積と三角形の面積との関わりを②のような等底等高の三角形で考えるのである。三角形は等底等高なら面積は必ず等しい(equal)〔三角形の面積は底辺×高さ÷2〕。ここでは $\triangle A_1BC = \triangle A_2BC = \triangle A_3BC = \triangle A_4BC$ で、同時に直線 A_1A_4 と直線 BC は平行(parallel)ともなる ($A_1A_4 \parallel BC$)。上の3つ目の図で考えればよい。

すなわち、まずは対角線 AC を引く。次に D からそれと平行な直線を引き BC の延長線との交点 E をとる。すると AC と DE は平行($AC \parallel DE$)で $\triangle ACD = \triangle ACE$ となる。この両辺に $\triangle ABC$ を加えれば 四角形 $ABCD = \triangle ABE$ であることが明らかになる(同時に図中で $x = y$ であることも分かる)。これで作図とともに証明終わり。補助線思考で部分(part)と全体(unit)の関係から四角のものが三角のものとなったわけである〔**Basic 語法 (ogdenism)** は幾何学的補助線思考を用いるという言い方もできよう〕。

古代ギリシャ時代に Euclid (ユークリッド) や Pythagoras (ピタゴラス) らに始まった言葉(words)によるこういう幾何学の証明法に、実は上記 cognitive linguistics や gestalt psychology 的な人間の認知・知覚能力の一端を垣間見るとともに、それぞれその接点を見ることとなる。数学や幾何学は文化を排除するが問題が解けた後に残るのはその美(the beautiful)の感情で、こういうときに味わう美的調和感(beautiful harmony)のようなものこそ、やはり Plato (プラトン) 風の美のイデア(Idea)か?

関連しては C. K. Ogden, I. A. Richards and J. Wood の *The Foundations of Aesthetics* 『美学の基礎』(1921)、また C. K. Ogden, and I. A. Richards の *The Meaning of Meaning* 『意味の意味』(1923)との接点

をも見る。EP本では幾何学的なものの導入もいくつか見る。真偽(true or false)で Ogden-Richards は真を2区分し True^Sと True^E(S: Symbolic / E: Emotive)としたが、真偽の追究で数学は常に True^Sを求める科学ということになる〔*The Meaning of Meaning* (p.151)参照〕。

また、衣食住をはじめ地球上の人間の日常社会生活は諸々の道具(instruments)の恩恵をこうむっている。身の回りを見渡すとよい。この世は神の創造物である人間が目的にかなうよう創造した道具(instruments designed for certain purposes)で満ちている。人間言語も Language is an instrument for thought. である。instrument は記号論・意味論のプレ入門用 EP本では I, p.97 で初出となり III で多くの例を見るが本来、この語はより早く(真っ先にでも)導入されてよいと思える。instrument は基本的に hand (手)を用いる。EP本では I, p.10 で初出の hand と同時提示でもよからう〔EP本は III⇒I・II の見方が要領がよい〕。

また EP本では seat より table が先提示となるが、逆のほうが実際にはよからう。物質の「椅子」に関しては「意味」の意味を追う Ogden-Richards の *The Meaning of Meaning* や本連載(59), (60), (61), (62), (67), (68)で触れた「無意味」の意味を追う G. Blocker の *The Meaning of Meaninglessness* でも議論されるが、instrument noun (道具名詞)として table (と名付けられた物質)より seat (と名付けられた物質)のほうがその本来的な telicity (目的相)からして「座るもの」がより前面に押し出される。椅子/seat と名付けられた (naming された) 物質を見て (look して)、それが「椅子/ seat」と分かるのもその「目的(purpose)」が分かる (see する) ことだろう。それを see しなければ椅子はその人にとっては無意味の存在となる。

seat, table, hat, key, knife, fork, spoon, scissors, wheel, hammer, spade, plow, paint, brush, etc.と命名された物質(thing of that name)で道具名詞(instrument nouns)は 'with', 'by', '(by) using', etc.としばしば共起(co-occurrence)するが、case (格)として locative case (位置格)と instrumental case (具格)が融合(syncretism)し perlativ (通格)となる例が見落とされてはならない(e.g., He got the door open with a key. ⇔ He made use of a key to the door to get it open.). [a key to the door = a door key (ドアの鍵)]. ここでは <We Do Things With X (for a certain purpose).> が深層パターン(deep pattern)として浮上り見えてくる。EP本なら I で She is taking its skin off with a knife. [its = potato] / We get them up with a fork. [them = potatoes in the earth] (p.92)、II で Men take the wool off the sheep's back with scissors. (p.100) / He puts the paint on with his paint brush. (p.109)の例も見る。

full English で i) John painted the wall with a brush. ii) Mary cut the cake with a knife. iii) I wrote the letter with a pencil. なら、各々 i) 位置格 wall・具格 brush、ii) 位置格 cake・具格 knife、iii) 位置格 letter・具格 pencil で、両者が融合した通格の例ということになる。「場と道具が一緒・一所(いっしょ)になる」見方で、今日的ないわゆる field theory (場の理論)とも関わる。存在には場(field / place / scene)がある。

Anderson, J.(1971)の *The Grammar of Case: Towards a Localistic Theory* 『格文法: 位置格論へ』は C. J. Fillmore の Case Grammar (格文法)での locative case に特別に照準するもので case (格)でのこの locative case (位置格)と、instrumental case (具格)の共起性(co-occurrence)とともに 2つの格が絶妙に融合した perlativ case (通格)はポイントで今後のさらなる重要追究事項の1つと考えてよい。

Ogden-Richards 研究では EP本 I-III がそもそも如何なる思想の下での編纂かが明確にされる必要がある。どう理解するか? 意味的な Graded (G) 性 / Semantically Sequenced (SS) 性とは何か? も問われる。EP本 I-III の流れは I の pp.1-30 程度で示されるものではなく、四則演算の加減剰余(+, -, ×, ÷)で加減(+, -)のみの提示から単発的に剰余(×, ÷)の少数・分数の取り扱いは無理となる。頁ごと(page by page)に手順が示される必要がある。IIIも本格的には順を追ったポイントが示されねばなからう。

挿絵による視覚本位(visual)で形式的(formal)・指示的(referential)な表示のみの EP本では III の巻末3頁前 p.231 までは、機能的(functional / notational)な側面から対人関係(interpersonal relations)などでの心的・感情的事項では満足な意思疎通は事実上無理となる。人に“How are you?” “こんにちは”、“Very kind of you.” “ありがとう”、“It was wrong of me.” “すみません”など挨拶・感謝・謝罪もできない理屈となる。interpersonal communication の観点からみた speaking 力を養うには心もとない。元来 EP本が時間をかけるのではなく、独自に手早く短期間で一通り流れを把握してしまう 独習書(do-it-yourself-book)たる由縁でもある。J. L. Austin の *How to Do Things with Words* (1962)で示される speech acts (発話行為)での illocutionary act (発話内行為)と perlocutionary act (発話媒介行為)を追究する pragmatics (語用論)、また前回触れもした M. Halliday 風の functional categories (機能的「類」概念)に照準する Systemic Functional Grammar [選択体系(システム)機能文法]などへの注目となる。重要なポイントである。特

に本会では非視覚的 interpersonal functions (対人関係機能) の問題は課題だろう [cf. function (関数)].

[以下、スペイン語翻訳版もある tweet (2018.01-05) より — 2言語対照]

(3) I have decided that sections of the Wall that California wants built NOW will not be built until the whole Wall is approved. Big victory yesterday with ruling from the courts that allows us to proceed. OUR COUNTRY MUST HAVE BORDER SECURITY! (February 28, 2018)

cf. He decidido que secciones del Muro que California quiere que se construyan AHORA no se construirán hasta que se apruebe el Muro completo. Gran Victoria ayer con fallo de las cortes que nos permiten proceder. ¡NUESTRO PAÍS DEBE TENER SEGURIDAD FRONTERIZA! (1 de marzo, 2018)

▲ やはりこれも黙読 10 秒ほど (反復を重ね 5 秒程度) で読み終えたい。徐々に上記 Functional Grammar (機能文法) 風の今日的な textual-thematic pattern (テキスト文主題パターン) の発見と内在化のレベルとなり真の英語力がついてくる。内容は「目下、カリフォルニアが建設を希望している国境の壁のいくつかは全体の壁が承認されるまでは無理だと私は決めていたが、昨日の裁判所の裁定では大勝利で仕事は続行できる、わが国は国境の安全の確保がどうしても必要なのだ!」である。

太線のラテン系 courts (法廷) はプラス α Basic 語で、*court* とイタリック体としておく。本連載(1)の⑤で扱ったのでこれも確認となる。原義は「取り囲むこと」でラテン系の Basic 語 *curtain* は同系語。印欧祖語 PIE の etymon (語根音素形) は/GHER/とされていて、初頭の無声子音[k]が有声子音[g]となるゲルマン系の Basic 語 *garden* は祖語の/G/の痕跡を残している同系語である。法廷・宮廷の「廷」は「庭」のこと。un-Basic 語では *escort* (護衛) や *courtesy* (礼儀) なども同系語であるが、厳粛な空間である宮廷や法廷での礼儀・礼節の含みもある [他の例は同上拙著、第二部、例(114)参照]。

太線の *proceed* は本連載(29)の(1)で見たが、Basic 語 *process* と同系であるし、*necessary* と同系。*necessary* は {ne (= not) + cess (= to go) + ary} で「行かせない、放さない」→「必要である」の意味である。un-Basic 語では *success*, *access* などが同系 [同上拙著、第二部、例(107)参照]。

二重下線の *wants built* の言い方には要注目。wants to be built ということ。

2つ目の二重下線中の *until* の *un* は *up to* の意味で Basic 語 *till* より意味は強まる。

2箇所¹の二重下線部で、英語での *indicative* (叙述法) もスペイン語では実現が不確かであれば基本的にはすべて *subjunctive* (叙想法) となる点には要注目となる。

cf. のスペイン語 *he decidido* (< *decider*), *secciones*, *muro*, *construyan* (< *construir*), *ahora*, *no*, *apruebe* (< *aprobar*), *completo*, *gran*, *victoria*, *corte*, *permiten* (< *permitir*), *proceder*, *debe* (< *deber*), *seguridad*, *fronteriza* は、それぞれ英語の *have decided*, *sections*, *mural*, *construct*, **no**, *approve*, **complete**, **great**, *victory*, *court*, *permit*, *proceed*, *security*, *frontier* に対応し同系語である。*ahora*, *apruebe*, *debe* はそれぞれ英語の **hour**, **approval**, **debt** (*duty*) と同系列でつながっている。

<備考> : “supporter’s” and “supporters” — Same or different (A = B or A ≠ B)? Here the answer is “unclear”.

別途の特記事項としておくが 2024 年 10 月末の大統領選直前 (Trump 氏にとっては翌月の 2 期目の大統領選直前) に Biden 大統領が Trump 氏支持者たち人間のことを *garbage* (ゴミ) と評したとし大問題となった。

事の発端は Trump 氏の一支持者で喜劇役者が Puerto Rico を ‘a floating island of garbage’ (ゴミの浮かぶ島) と呼んだことを受け、Biden 大統領が “The only garbage I see floating out there is his supporters.” 「あその島に浮かぶ唯一のゴミは Trump 支持者たちだ」と言ったということであった。一方、Trump 氏側は Biden 大統領は Trump 支持者の人間全員を侮辱をしたとして問題とした。その後 Biden 大統領側は supporters はアポストロフィー (apostrophe) 付きの supporter’s の意味だと弁明した。ゴミとは supporters (Trump 氏支持者たち) のことではなく supporter’s (Trump 氏支持の一喜劇役者の言葉) の意味だと弁明することとなった。発話での transcription (書き起こし) の問題ともなったわけであるが、homophone (同音異義語) の ambiguity (曖昧性) の問題でもあり興味深い。

G. Orwell が *Politics and the English Language* (1946) 『政治と英語』で政治言語の使い方戒めた What is above all needed is to let the meaning choose the word, and not the other way about. や Never use a metaphor, simile or other figure of speech ... という言葉がここで改めて想起もされよう [本連載、前々回(67)末尾参照]。

